

報 告

カナダ アルバータ大学における国際交流事業の活動報告

桑原ゆみ

札幌医科大学保健医療学部看護学科

2018年度札幌医科大学国際医学交流事業において、2019年2月11日から2月24日、カナダ、アルバータ大学を訪れた。今回の交流研究の目的は、カナダ、アルバータ州における公衆衛生看護活動の実践、アルバータ大学看護学部における公衆衛生看護学教育と看護研究に関する見聞から、今後の教育・実践・研究に応用・発展するための示唆を得ることとした。本稿では、保健センター、コミュニティーセンターの見学、公衆衛生看護学を教育している教員のインタビュー、看護プログラムを開発し社会実装を展開されている看護研究者のインタビュー等の交流研究内容と得られた示唆について報告した。

キーワード：アルバータ大学 国際交流 カナダにおける看護教育

International exchange programs at University of Alberta, Canada

Yumi KUWABARA

Department of Nursing, School of Health Sciences, Sapporo Medical University

As a part of the exchange programs of Sapporo Medical University with other international medical schools, the author visited University of Alberta, Canada from February 11th to February 24th of 2019. The purposes of this exchange program were to observe the nursing practice of Alberta, to discuss with the community health nursing educator and nursing researcher in University of Alberta, and to get suggestions for application to develop for future community health nursing education, practice and study. This paper reported my visiting to health center and community services center, my interview with community health nursing educator and nursing researcher who develop nursing program and implement program in University of Alberta and suggestion of these experiences.

Key words : University of Alberta, International exchange program, Nursing education in Canada

Sapporo J. Health Sci. 9:63-67(2020)
DOI:10.15114/sjhs.9.63

I. はじめに

2018年度の札幌医科大学国際医学交流事業に基づき、2019年2月11日から2月24日、カナダ、アルバータ大学看護学部において交流研究の機会を得た。交流研究の目的は、カナダ、アルバータ州における公衆衛生看護活動の実践、アルバータ大学看護学部における公衆衛生看護学教育と看護研究に関する見聞から、今後の教育・実践・研究に応用・発展するための示唆を得ることとした。具体的なスケジュールは表1に示す。本稿では、今回の交流研究で得た具体的体験と示唆について報告する。

表1 交流研究スケジュール

2月	曜日	内容
11日	月	新千歳ー羽田ーバンクーバーーエドモントン
12日	火	Dr. Solina Richterと打ち合わせ（写真1） 大学内見学 手続き
13日	水	Rebecca Low氏と Boonie Doon Public Health Center見学
14日	木	Melarie Meardi臨床教授と Boyle Street Community Services見学
15日	金	公衆衛生看護学担当教員Kerry Rusk講師 インタビュー
18日	月	Family Day 大学構内のRutherford House見学
19日	火	看護研究者Dr. Wendy Duggleby教授 インタビュー 大学院生 インタビュー
20日	水	Lunch & Learn ランチをとりながらの研究学習会 （写真3）
21日	木	Western Northwestern Region Canadian Association of School of Nursing学会
22日	金	Dr. Solina RichterとClosing Meeting
23日	土	エドモントンーバンクーバーー羽田ー新千歳
24日	日	



写真1 打ち合わせの場所の様子

II. 交流研究の内容

1. カナダ、アルバータ州における公衆衛生看護活動

公衆衛生看護活動の場として、Boonie Doonという地域の保健センターとBoyle Streetにあるコミュニティー・サービスの2か所の見学の機会を頂いた。両施設では、実際に活動している看護師の方から丁寧な説明を受けた。なお、カナダでは、「保健師」という国家資格は存在せず、「看護師」免許で公衆衛生看護活動を実践している。

1) Boonie Doon保健センター

エドモントン市にある12の保健センターのうちの一つであり、母子保健担当10人と学校保健担当5人（パートタイムの雇用も含む）の計15人の看護師が公衆衛生看護活動を展開している。母子保健担当の業務は、小児感染症のワクチン接種、出産し退院した母子への家庭訪問支援、センター内でのNew Mother Networkの開催、および1か月に1回のスタッフ会議である。乳幼児健診はかかりつけ医で実施されていた。ワクチン接種に子どもを連れてきた母親・父親が保健センターを訪れていた。New Mother Networkは、生後6週～6か月児の母を対象に、グループで集まり話し合うということだった。日本の育児サロンなどに該当する集団支援・グループづくりであると推察する。家庭訪問支援はエドモントン市のHealthy newborn programとHome visiting programという2つのプログラムに該当する支援であり、出産し病院から自宅に戻る母子の情報が母子の住所を担当する地区の保健センターに毎日FAXで連絡が入り、出産したその日もしくは数日以内に保健センターの担当者が出産した母もしくはパートナーに電話で連絡し、支援を行うものである。出産後1～2日で退院する母子がほとんどであるとのことだった。保健センターの担当者が電話で状況を確認し、訪問支援もしくは保健センター内での支援を行い、2か月間フォローアップすることが基本とされていた。

実際に夕方に病院からFAX連絡が入ると、看護師が電話連絡を次々に行い、翌日以降の訪問支援を母親と調整していた。第4子として約3000グラムで出生した女兒の母親との電話では、まず出産のお祝いの言葉を伝え、児の母乳栄養の状況や排泄の様子を確認し、異常がないことから母親の希望である2日後の訪問支援を調整していた。また、何か不安な状況が生じた際にはホットライン看護師（児の緊急事態が発生した際に優先して電話対応する）に電話するように伝えていた。電話で得た情報とアセスメントと支援計画をパソコンでアルバータ州の共通記録入力ソフトに入力し、2日後の訪問支援時に勤務している看護師が訪問可能な状況に整えていた。別の電話連絡をしていたケースは、ブラジル人の40歳代の初産婦で、自身の両親はカナダ国内に居住しておらず、夫と別れたいと訴えていた。当日

の気温はマイナス20℃台であり、気温が何度だったら何分くらい外出していいのか等の基準を知りたいと説明や根拠を求めていた。看護師は、児の様子や乳房の様子などを確認しつつ、厳寒期の外出上の注意だけでなく生活で気を付けてほしい内容も伝えていた。40歳以上の初産婦を支援した助産師へのインタビューから40歳以上の初産婦に対して経験10年以上の助産師が行っている産褥期のケアを導き出した研究¹⁾では、柔軟性がなく、融通が利かないことや育児方法について理由を求めることが多く、育児方法等について論理的に説明するという支援が提供されていると報告されている。国は異なるが40歳以上の初産婦の特徴が類似していると思われた。

家庭訪問に同行したケースは、低出生体重児の男児で、20歳代のアジア系の母親と母親の両親が在宅していた。継続訪問事例であり、同行したのは3回目の支援場面だった。児の黄疸が軽減していることや児が開眼し母親を凝視する等の良い変化がみられることを伝え、育児方法が効果的であることを伝え励ましていた。母親とその両親は安心した様子で、笑顔で応答していた。電話連絡のブラジル人のケースや家庭訪問のアジア系のケースのように支援を必要とする母親の人種が多様であることは、カナダの特徴の現れであると思われる。看護師が対象者の民族的な背景を捉え個々を尊重した支援をきめ細やかに実施しており、日本における支援との共通点であると同時に、今後も重要な点であると考える。

2) Boyle Street Community Services

エドモントン市の市役所や美術館の近く、Boyle Streetという人口密度の高い地区にある、エドモントンで最も大きいサービスセンターである。ホームレスの人々を支援するために、住居や移動、就労支援、昼食や軽食の提供、IDの再取得支援、IDがなくても写真で利用可能な銀行の運営、安全な薬物使用の教育と場の提供、メンタルヘルス支援、ハンドブックの作成と配布といった活動をセンター内で実施している。また、実際に街に出て活動するStreet Work outreach program（ホームレスの人々に街で声をかけてサービスにつなげる、相談を受ける等）という支援や若者のアクティビティへの参加を促す支援のようなセンター外での支援も提供されている。ワンストップでホームレスの人々が生きるための支援が提供されていることが印象的だった。サービス利用者の視点で、サービス内容やセンターの機能が揃えられており、利用しやすく必要な支援を受けやすいシステムとなっていた。社会福祉士、メンタルヘルスの専門家、看護師などのスタッフとボランティアが運営にあたっており、1日に30人が支援に従事しているとのことだった。多くのホームレスが利用しており、昼食の提供やスタッフへの相談、センター利用者同士で会話する様子を見学した。

重篤な薬物依存症の人々のために、安全な薬物使用の教育と場の提供が行われていた。注射器や針を受け取る事が

でき、またセンター内で薬物使用のための部屋が用意され、内部の見学は許されなかったが、室内は間仕切りされた個別のブースとなっているとの説明を受けた。また、その部屋には看護師が待機していて、相談に応じているとのことだった。カナダでの薬物汚染の蔓延の現状と大きな課題を実感し、愕然とする体験だった。担当しているスタッフからは薬物使用を絶つことができれば良いが、出来ないのであれば、その人の命を守るという支援をする必要があることや、これらの支援にあたる葛藤が語られた。

2. アルバータ大学での看護教育の現状

1) 講義と実習の概要について Kerry Rusk講師へのインタビューから

カナダでの看護教育の現状として、特にアルバータ大学でのCommunity Health Nursing地域看護学に関する教育について、学部教育の担当者であるKerry Rusk講師へのインタビューの機会を得た。地域看護学関連科目は、大学3年生での週3回の講義が行われ、ヘルスプロモーションや地域診断について教授されていた。学校保健や産業保健に関する講義は行われていないとのことだった。また4年生で7週間の実習が組まれており、16か所の実習先が準備され、学生は複数個所の実習を体験するとのことだった。8人が1か所の実習先に配置され、臨床教授等の実習指導者が実習先ごとに契約されていた。実習先例として、マタニティークリニック、Boonie Doon保健センターを含む保健センター、Boyle Street Community Services、小中学校、10代の妊娠をサポートするセンター、サスカチュアン居住地区にあるParents Rink Center, Military Family Risk Center等だった。実際に使用している教科書²⁾でも記述されているAboriginal HealthやRural Health、貧困やホームレスに関する支援、薬物使用に関する内容に対応する多様な実習先である。日本での教育より、多様性の幅が広く、支援機関も細分化されていた。実習先を確保することに困難があることや学生が実践する内容が少ないことが課題として挙げられ、これらの点は日本における教育と共通であると思われる。また、講義時間が少なく、演習時間が不足するため、地域診断などについては実習において実施し検討することで対応しているとのことだった。日本では、公衆衛生看護学の重要ポイントの一つとして施策化や公衆衛生看護管理に焦点があてられているが、カナダでは地域を診断し、計画・実施・評価する施策化に関して看護としての実践は行われておらず、公衆衛生学の専門家が実践しているとのことだった。卒業後の学生の進路については、公衆衛生看護実践の道を選択する学生が少ないことが課題として語られた。

2) Boyle Street Community Servicesでの学生実習の様子

筆者がBoyle Street Community Servicesを見学している際に、学生実習の様子も見学する機会を得た。3人の学部生が実習しており、臨床教授の指導のもと、サービス内



写真2 缶切りと缶

容の見学とスタッフへのインタビューから、ヘルスリスクアセスメントを実施し、スタッフを集めてOccupational Health and Safetyと題してプレゼンテーションを行うところだった。学生が自主的にテーマを考えて、学習の結果をスタッフと意見交換し、スタッフも真剣に学生のアセスメントを聴きディスカッションしていた。学生がセンターの周辺を見回り、街灯が点灯していない場所がある事を伝えた際には、すぐにスタッフにより確認され点灯するように修繕されたのが印象的だった。実習を展開しながら、実習先の改善につながっていた。筆者が、学生の主体性の高さや現場の反応について驚き、臨床教授に質問したところ、別の学生実習の例を挙げていただいた。昼食を準備するため多数の缶をボランティアが缶切り（写真2参照）を使用して空けている作業を見学していた学生が、開けやすい缶が必要ではないかと考え、缶を製造している企業に意見を伝えたところ、企業が缶製品の改善を行い、缶切りを使用しなくても開けられる缶製品の作成につながったという例であった。このように学生の気づきや提言が実習先や企業を変革する力につながっていることは、素晴らしいことであると考える。

3. 看護プログラムの開発と継続的な社会実装の展開

1) Wendy Duggleby教授への研究に関するインタビューから

アルバータ大学看護学部在籍されている看護研究者で、Living with Hopeプログラムを開発され、現在も継続してプログラムの社会実装を展開されているDr. Wendy Duggleby教授にインタビューする機会を得た。Living with Hopeプログラムは、がん患者や認知症とともに生きる高齢者とその家族を支援するプログラムであり、博士の研究知見を基に開発されボランティアスタッフ、行政、学生などと協働しながら外部資金を得て展開されている。2日間の研修を受けたボランティア・ナビゲーターが、がんや認知症などの慢性疾患と共に生きている高齢者の自宅等

を訪問し支援するプログラムである。実際の様子がNav-Care film³⁾で紹介されている。支援を実践していきながら、6か月に一度の会議を開催し、ボランティアの役割を確認したり、ロールプレイを取り入れたスキルアップを行ったりしながら、カナダのエドモントン州以外の複数の州でプログラムが広域に展開されている。PDCAサイクルを何度も回している正に社会実装されているプログラム⁴⁾である。プログラム開発までの道のりを尋ねたところ、高齢者の痛みの研究から始まり、Hopeの概念、変化や移行理論、不確かさの理論について検討されていた。高齢者にとってHopeとは何か、どのように変化するのか、Hopeに関して支援してほしいことは何かについて高齢者や介護者にインタビュー⁵⁾し、プログラム内容や評価が検討されていた。また、ボランティアにフォーカスグループインタビューを行い、必要な知識や能力について質的研究を行い、その研究知見から上記の2日間の研修内容を開発してきたと語った。また、6か月ごとに担当者会議を開催し、高齢者のQOLや満足感、ボランティアに関して継続的なプログラム評価が行われている。今後はコスト分析や、プログラム利用における救急車・薬物療法の利用減少などがあるかどうかについても評価を行いたいと語られた。

プログラム開発で重要な点は、プログラムで用いる重要概念やモデルをよく検討すること、プログラムの対象となる人々にインタビューしプログラムに関連する事象を良く理解すること、これらの研究知見に基づき開発を行うことであると示唆された。また、継続的な社会実装を展開する上で重要な点は、多様な人々と協働すること、外部資金を得ること、継続的な実施と評価の仕組みをつくること、改善しより良いプログラムを展開することであると示唆された。

III. おわりに

公衆衛生看護活動の実践、教育、研究に関する事前の希



写真3 Lunch & Learn

望を最大限に取り入れて研修プログラムを立案いただいた。報告した内容以外にも、ランチをとりながらの学習会（写真3）や巨大なモールの一角で開催されたWestern Northwestern Region Canadian Association of Schools of Nursing学会に参加させていただき刺激を受けた。

アルバータ大学の窓口となって下さったSolina Richter教授から、本事業に関して是非多くの要望を出して相談してほしいとのことであった。今後のアルバータ大学と本学の国際交流事業が継続して展開される中で、派遣者が研修に関する要望をアルバータ大学に具体的に伝え調整していただくと、交流がさらに深まると思われる。

謝 辞

今回、国際医学交流事業での交流研究という貴重な経験の機会を頂き、塚本泰司学長、大日向輝美学部長、国際医学交流事業ご担当の先生方と事務局の方々など学内の関係各位の皆様、さらにアルバータ大学でコーディネートを担当して下さったDr. Solina Richterはじめ関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 植木瞳：40歳以上の初産婦に対して経験10年以上の助産師が行っている産褥期のケア，平成30年度札幌医科大学大学院保健医療学研究科博士課程前期修士論文，2019
- 2) Stamler LL, Yiu L, Dosani A: Community Health Nursing A Canadian Perspective. (Fourth Edition). Ontario, Pearson Canada Inc., 2016
- 3) Nav-Care film: <http://www.nurs.ualberta.ca/livingwithhope/>, (2019-12-18)
- 4) 平成29～30年度研究活動推進委員会：平成30年度第1回研究セミナー「学際的研究・国際共同研究を行うには」. 日本地域看護学会誌22(2)：97-105, 2019
- 5) Duggleby W, Schroeder D, Nekolaichuk C: Hope and connection: the experience of family caregivers of persons with dementia living in a long term care facility. BMC Geriatrics. 2013, 13:112. <http://www.bio.edcentral.com/1471-2318/13/112>, (2019-12-18)